無為を楽しく過ごすため

赤角

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無為を楽しく過ごすため

【Ｎコード】

Ｎ８９６１Ｋ

【作者名】

赤角

【あらすじ】

ガンプラが大好きな中学生、神山龍斗のマンガがみたいな日常生活。

ガンダムネタたくさん出す予定です。好きな人もそーでない人も読んでみてください

あいさつ

とりあえずガンダムが好きな中学生のハチャメチャな学園生活を書くつもりです。
誤字脱字は当たり前！と思って読んでいただくとうれしいです。（できるだけ気をつけますが・・・）

ガンダムネタはバンバン出ますので気をつけてください。わかんない人はスルーしてください。

個人的には刹那さんが好きです。あ、わかんない人はスルーしてくださいね

ファーストからＯＯまでほとんど全部好きです。
ガンダムは永遠のベストセラーだ！

諸事情により変なところもありますがほっといてください。

ちょっとのぞきに来たって人は一応最後まで読んでってみてください＾＾

ではでは失礼

連続記録

俺を急かすようなチャイムは冷酷にも鳴り止む・・・

ダッシュで階段を駆け上がっていた俺はその場に崩れ落ちた。

「今日もか・・・。くそ～」

俺、神山龍斗（かみやま たつと）はたった今、1週間連続（実質的5日間）遅刻という史上最高記録をマークした。

・・・いらね。そんな記録いらね。

うちのクラスはスガさん（本名菅井武生・・・うちのクラスの担任である）が「確認がメンドーだー」って言って「俺より後に来たやつが遅刻だー」って言ってたからまだ決まったわけじゃ無いが・・・

「おい、龍斗。そんなとこで何してる？」

スガさんはいつもくるの早いもんな～。

「おーい。きーいてーるかあー。」

ああ・・・これで内申書に・・・ん？

「うわっ！スガさん！」

「何やってんの？甘納豆でも落ちてたか？」

甘納豆はスガさんの好物だ・・・ってのは置いといて！

「まだ間に合う！」

俺はまた走り出した。

「えー甘納豆ー」

そういうスガさんの声が遠ざかっていく

「セーーーーーーーーーーーーーッフ！！！！！！」

俺は教室のドアを開け自分の席につくまでの動作を「ーーーーーーーーーーーーー」の間にやってのけた。

「すごい肺活量だねー。龍斗」

隣の席の秋山由佳（あきやまゆか）が感嘆したように言う

ふいー。確かにこの中学校生活1年と2ヶ月ちょいの中で一番体力つかったぜい。

「まあ通常の三倍ってとこかな」

「えっと・・・アムロだっけ？」

「シャアだよ・・・。覚えてねーなら無理に使うなよ。」

「あはは。ごめん」

まったく・・・。由佳は俺と部屋が隣、生まれた病院まで同じとい

うスーパー幼馴染なのにガンダムについては全然だめだ。
ガンダム大好きのこの俺の近くに１４年ぐらいいたやつとは思えない。

「は～い。おはよー。遅刻は・・・ゼロかー」

そこにスガさんが教室に入ってきた。随分おそいな・・・まさか甘納豆探してたとか？それはないか・・・

そんなこんなでホームルームも終わりー・・・と思ったら

「あ、龍斗はちょっと先生のとこ来い」

んん！？まさかさっきの遅刻扱いになるとか！？
不安を胸にいっぱいつめてきた俺にスガさんは

「あのなあ・・・」
とためる。　うう、こええ・・・

「甘納豆無かったじゃん！！」

そこかよ！！

朝から騒がしい俺の今日はどうなることやら・・・

連続記録（後書き）

ふう。疲れました

悪魔

甘納豆なんか知らない、と言うことをスガさんに理解させるのに苦労して今日が絶望的になってしまった俺は机に突っ伏した。

「うううううううううううううううううう・・・・・・・・・・・・・」

「な、なんか危ないね。タツト。」

後ろの席にいる俺の親友、中越達樹（なかごしたつき）は心配してくれたのか、声をかけてきた。

こいつとは、小学校も同じで、名前も一字違いなので馬が合い、すげえ仲がいい。

「ス、スガさんが・・・」

「あ、スガさんって甘納豆のことになるとすごい執着するもんね」

「お前、相変わらずすげえ直感だな・・・」

「才能といってくれよ。ハハハ」

今も言った通り、達樹は「一を聞いて十を知る」的なところがある。

彼のために捕捉すると、彼はナルシストではない。

「二人で何はなしてんの？」

由佳が俺たちに話しかけてきた。

「いや、スガさんが・・・」

「???スガさんがどしたの?」

彼女は、達樹とは正反対だ。全く勘が働かない。

「甘納豆が・・・」

俺が言おうとすると、一人の女子が割り込んできた。てゆうか俺に抱きついてきた。

「たっくううううううん!!」

「ぐはあ!」

「何で今日も遅く来たのお?寂しかったよおおおおおおお」

・・・彼女の名前は山本香澄(やまもとかすみ)。普通の女の子なんだが・・・。俺に対する態度は・・・まあこんな感じだ。

ていうかさっきの鳩尾はいったんだけど・・・

ん?なんかすごいオーラが・・・。

・・・・・・!忘れいていた。香澄と由佳を一緒にするとあんなことが起こるのを・・・

「龍斗？・・・こんなところでなぁぁぁにやってんのかなあああ？」

「いや、俺やってないし・・・いや待てって由佳。これには深～い訳が・・・ないか。」

「無いならなんで抱きついてんのぉぉぉぉぉぉ！？」

俺はこの朝から最悪なこの日のことを絶対に忘れないだろう。

悪魔（後書き）

今日も短めです。疲れたから。

つくろう！部活

「うううううううううううううううううううう・・・・」

「この前より大変そうだね」

「あれを切り抜けるのにタツト流忍術を使わなければならなっかた・・・」

「忍術使えんの！？すごいね！」

「お前ほんとに純真無垢だな。詐欺にあわないように気をつけろ」

「えっ？じゃあ忍術って嘘なの？」

「・・・いや。・・・ほんとだけど。」

「やっぱり！どんな感じの忍術？」

「・・・忍法俊足の術」

・・・まあつまり走って逃げたんだが。

今俺が話してるのはカスミがきた瞬間逃げ出した薄情なタツヤだ。

授業は終わって暇なので屋上にいる。

「タツトは部活入らないの？」

「おめーも入ってねーじゃねーかよー。こうやって放課後の無為な時間を過ごすのがいいんだよ。・・・ま、この学校にガンプラ部でもあれば入るかもな」

もうお気づきかもしれないが俺はガンダムが大好きだ。お気に入りはダブルオークアンタ／ＦＳだ。

「じゃつくればいいじゃん」

「めんどい。そして部員が集まらないと思う。この学校にガンダマーは少ないからな」

ガンダマーとは俺が勝手につくった用語で「ガンダムが好きな人」と言う意味だ。

「そっかー。タツトが作った部なら女子がたくさん入るんじゃない？君モテるし・・・」

タツヤ曰く俺はもてるらしい。自覚はまったく無いが。

「それにうちの学校は届け出さえすれば簡単に部活作れるんだよ。申請が通れば部費ももらえる。そしてちゃんとした理由があれば絶対通るらしいよ。・・・例えばＡＫＢの追っかけとか」

初めて知った。　ってゆうかそんなにほいほい部費を出していいのか？ＡＫＢ？

そこで屋上のドアが開いた。ユカとカスミだ。・・・仲良くなったのか？

「何話してたの？」

「部活についてだけど」

「タツト部活はいるの？」

「いや・・・つくろうかなー・・・みたいな。ところでカスミはなぜしゃべらない？」

「約束。」

「はい？」

「ユカと約束したの。だからできるだけ抱きついたりしないようにするから。」

それはそれはありがたいこった。会う度に鳩尾入れられたらたまらん。

「ところで部活つくるの？じゃ４人でつくろう！」

「は？？」

『

Ｓｕｐｐｏｒｔ

Ｋｉｎｄｎｅｓｓ

Ｅｎｃｏｕｒａｇｅｍｅｎｔ

Ｔｒｏｕｂｌｅｓｈｏｏｔ

『

「そう！俺たちは！スケットｄ・・・って１人多いわ！パクった上に１人おおいからっ！もっと真面目にかんがえてっ！」

そんなこんなで部活決めは・・・

「仲良し部！」

「友達部！」

「楽しい部！」

「君たちぁー小学生か！そしてタツトも交ざるな！」

順調に・・・

「もうつくんなくてよくね？」

「諦めるな！僕も少し思ったけど諦めるな！」

進んでいった・・・

「よし！決めた！」

「何？タツト」

そして・・・

「ソレスタルビーイングだ！」

「なんて！？」

ソレスタルビーイングになったそうですwwwww

つくろう！部活（後書き）

俺たちがガンダムだ！

部活っていいね

「出してきたぞ」

「出してきたの・・・・？」

「ほんとに・・・・」

「出してきちゃったの？」

「おう！部長は俺だからな！」

あの後・・・ソレスタルビーイングだと流石に意味不と言う事で４人の部活の名は・・・

「今日から俺らは無為を楽しく過ごす部だ！」

「わーい」

「きゃっほーい」

「何すりゃいいんだー」

「だから放課後になんとなく集まって、なんとなく過ごして、なんとなく解散する。本を読んでもいいんだぞ」

「僕はタツトほど読書家じゃないよ」

そう、俺は読書が好きだ。勘違いして欲しくないが、決して陰惨なインドア派ではない。

しかしタツヤときたら、全く本を読まないときた。折木奉太郎や伊丹耀司を知らないとは可哀相な奴だ。

「ま、来なくてもいいんだけどね」

「ねえねえタツト」

「なんだユカ」

「無為を楽しく過ごす部って呼ぶのめんどくさいから、『無楽部』って呼ぶ事にしようよ」

「ノリノリなのはいいがな、なんかぜんぜん楽しくない部活ではないか。・・・まあいいか。じゃあ無楽部最初の集会終了ー。はい解散ー」

なかなか楽しそうじゃないか

部活っていいね（後書き）

短い。

部室！？

放課後。青春を謳歌している高校生たちは部活へ行ったり恋人とデートなどに行ったりしてる。何もする事の無い、一般的に「暇人」などと呼ばれている人たちは家や寮に帰ったりしてる。
あ、この高校、寮があるんです。いや別に今考えたとかじゃなくてね。タツト、タツヤ、ユカ、カスミはみんな寮に入ってるんだよ。

ま、そんなどーでもいー事は置いといて・・・

放課後の屋上です。

タツヤ、ユカ、カスミが一応「部活」という事なのでたむろしてましたw

「ってかタツト遅くね？」

「なんか先生に呼ばれてたけど？」

「お、とうとう退学か。」

「なんで？」

「遅刻しすぎで」

遅刻で退学になるのか？

そのとき、屋上のドアが開いた。タツトだ。息を切らしている。野

良犬にでも追いかけられたかw

「も、も、もらえるぞ！」

「あ？なにが？」

「部室！！」

この高校は部活が自由につくれるので、部活の数が半端ない。古典部から学園生活支（ｒｙまでたくさんだ。だが、部室の数が限られているので、意味のわからない部活（あそ部、手に酢部、エオンフヤー部など）は部室なしだ。

しかしこの無楽部はもらえたみたいだな。何でだろ。

「どうして！？」

「うん・・・。校長にこのこと言ったら、なんかくれた。」

「なんつったの？」

「えっと・・・『暇な放課後を楽しく過ごすための部活です』って言った」

「・・・なんでくれたの？？」

「いや・・・俺も聞いたんだけど。『気分だ！』だって。」

そんな校長で大丈夫なのだろうか。

実はちょうどよく廃部になった部活の部室があいたのでそれをくれるんだそうだ。

じゃ、行ってみよう！

「と、その前に。部室代。明日に用意しろって」

この高校は部活をつくるのは無料だがなぜか部室をもらうのには金がかかる。・・・なんでだろう。

「いくら？」

「・・・６万円だ。」

「ん～と。じゃ、明日にみんな全財産もってこい。たくさん持ってる奴がたくさん出す」

「さんせ～い」

ってことで次の日

「タツトいくら持ってきた？」

「２万円」

「ほうほう」

「ほうほうじゃねーよ。お前いくらだよユカ」

「５００円＾＾」

「全財産って言ったよな」

「うん、全財産！」

高校生でうまい棒５０本分とは・・・

「もういいや。カスミは？」

「1万円」

うん、普通だ。うまい棒１０００本。

「・・・タツヤは？」

お気づきかもしれないが、現時点で全然６万円に足りてない。

「ん？えっと・・・１００万円ぐらい？」

「うん、そうか・・・。全部お前が払え。」

タツヤは大金持ちのボンボンなのでしたｗ　いや、だから今考えたわけじゃなく。

「なんだよお前！！６万円集まんなくて、『よし、無楽部最初の活動だ！』ってなってがんばるっていう予定だったのに！」

「いや・・・まあるもんはしょうがないし・・・」

これだからボンボンは。流石うまい棒１０万本。

と言うわけで部室です（笑）

「うわー広いなー」

「これって東京ドーム何個入るんだろう？」

多分1個未満です。

「前は何部だったの？」

「柔道とかプロレスとか？」

「いや、手芸部だ。」

「へ、へぇ～・・・。大人数だったんだな」

「いや、2人だ」

なにをしていたのだ手芸部は。

「とりあえず、今日からここが・・・俺たちの・・・部室だ！！」

刹那風に言っても誰も気づいてくれないのでしたw

部室！？（後書き）

ちょっとがんばった＾＾

まったりと（前書き）

タツヤ「なんで途中から俺らの名前、カタカナになってんだろ？」

タツト「一発変換とかできて楽だからじゃね？」

まったりと

「ふぃ～」

俺は部室でくつろいでいた。

「これで部活っだってんだからすげーなー」

今部室にいるのは俺だけだ。さっきまでタツヤとカスミがいたが２人一緒に帰っていった。最近あの二人は仲がいい。・・・別に寂しくなんか無いが。

あれから部室はすごく豪華になった。ソファーやテーブル、冷蔵庫までである。テレビは地デジ対応だ。４人分のデスクにそれぞれパソコンもついてる。特に何もしない部活の部室とは思えない。まあ少しは部費も出たが、ほとんどはタツヤの負担だ。あいつはこの前１００万円持ってきたがあれは全財産じゃ無いらしい。ほんとはいくら持ってんだか・・・。・・・ん？あいつ現金で１００万持ってきてたのか！？

「誰も来ない・・・」

なんでユカは来ないんだ？別に来なくてもいいんだが。

「ふ～～～～～」

一人では何もする事が無い。すさまじく暇だ。

しょうがないので、持参したＭＧダブルオークアンタをつくる事に

する。・・・と言っても後はスミ入れしてトップコートを吹くだけなのだが。

ん？これは・・・。いや・・でも・・・。やっぱり・・・。

腹減った。

やばい。この腹の減りようは。３０分以内になんか食わなきゃ死ぬぞ・・・。それは無いか。

しょうがないので売店へ行く。そしたらそこにユカがいた。

「何やってんだお前」

「部室で食べるためのパンを選んでる」

こいつの表情は真剣そのものだ。

「・・・いつからだ」

「授業終わってからずっと」

「もう2時間ぐらい経ってんぞ」

「えっ？・・・。ほんとだ」

うん。こいつは釣りとかやってると時間忘れる派だな。

「ってゆうかお前全財産５００円だろ？」

うまい棒５０本。

「うん。だからずっと選んでる」

そゆことか・・・

とりあえず俺はパンを数個選んでレジに並ぶ。

「え！？そんなに買って大丈夫なの？」

「ああ。腹へってんからな」

「じゃ無くてお金！」

「・・・少なくとも５００円以上はある」

「じゃ、これも！」

「・・・しょーがねーな」

パンを買った後、部室に戻った。

ソファーに座ってパンの袋を破る。

「あれ？他の二人は？」

「もう帰ったよ」

「ふう。カスミがあなたから離れてくれてよかった」

「それはどういう意味だ」

「へ？まあ・・・幼馴染として？」

「さいですか」

パンを食べ終わるとまたやる事が無くなる。だが今は二人である。さっきほど暇でもない。

「はぁ～～～～～～～。なにする？」

「トランプ！」

「無い」

「人生ゲーム！」

「無い！それに二人でか！？」

「じゃ～～・・・。なにしよっか」

「そ～だな～」

なーんてやってたら俺の携帯が鳴った。タツヤからメールだ。

『商店街の裏でヤクザっぽいのが喧嘩してるよ♪みんな迷惑してるから制裁ヨロ』

なんでいつも俺はこういう係なのだろうか。まあしょうがない。

俺の父さんは刑事だ。それが関係してるのかは知らんが俺は人に迷惑をかける奴が許せない。

「ちょっと用事できたから帰る」

「そう。気をつけてねー」

ってことで商店街だ。

「オラァァァァ！んだとコラ！！」

「死んどけやコラ！」

「お前のかあちゃんでべそ！コラ！」

「俺はそろばん3級だコラ！」

「俺なんか英検4級だコラ！」

何でこいつらはそこまで『コラ！』が好きなんだ？・・・なんか変な自慢もしてた気もするが。

「うるさいよおっさん達」

「あ？」

「うん？」

「はあ？」

みんな俺のほうに顔を向ける。うわあ。ガラ悪いな。

俺は父さんからもらった特殊警棒、通称「ＧＮスティック」を伸ばした。特殊警棒とはまあ特殊な警棒である。ＳＰでよく井上薫が振り回してる奴だ。実はこれって凶器として見られるらしいが父さんの権限で俺は持ち歩く事を許可されている。父さんは結構偉いのだ。

俺はおっさんたちの中に突っ込んだ。

「目標を駆逐するっ！」

「ふう・・・」

駆逐、終わりましたw

俺は昔、いろんな武術をやっていたので意外と強い。タツヤ曰く「超強い」。ヤクザのおっさんなんて敵ではないのだ。

・・・でも疲れた。早く家に帰って寝よう。

あ、クアンタ部室に置きっぱなしだ。ま、いいか。

まったりと（後書き）

眠いのです。
感想待っとるっす

クアンタム！（前書き）

あ、題名に特に意味は無いです

クアンタム！

ヤクザのおっさんたちを駆逐した次の日

「ういーす」

「おーう」

「ん？ここに置いといたクアンタは？」

「ああ。そこの棚に移しといた。その棚ガンプラ専用な」

達也が指した棚は、すげーでかっかた。天井に届いてる。

「お前が用意したのか」

「そだよ。タツトのことだからここでガンプラ作り出すと思ったから」

「おお。いーなこれ」

「ところで商店街のおっさん達。どうなった？」

「おう。GNスティックの敵ではないな」

「君はただでさえ『鬼に金棒』状態なのにその警棒持つともうすさまじいだろうね」

「『クアンタにフルセイバー』ってとこだな」

「・・・よくわかんないけど」

「今日ちょうど持ってきてるぞ。ＨＧのクアンタと一緒にここで仕上げようと思って」

「別に見せなくてもいいけど」

そこで扉が開いた。

「ここは『無楽部』の部室ですか？」

「そうだけど」

「ええと。入部希望なんですけど・・・」

タツトとタツヤは顔を見合わせた。

「お、おお。まあ座れ」

「はい・・・」

「お前名前は」

「二ッ谷拓（ふたつやたく）といいます」

「ほう。タクか。タクは何年生だ？」

「2年です」

「何だよタメじゃねーかよ。敬語とか使わなくていいぜ」

「何だタメなのか。先輩かと思った」

とタクはほっとしたようだ。

「で、何だ。何でこの無楽部に入ろうと思った」

「暇だから」

「・・・お前放課後は何してる？」

「んーと。ゲームセンター行ったり。家に帰って寝たり」

「うむ。いやもう入部する理由とかは十分だな」

「じゃ入部していいのかね」

「うーん。ま、いいか。よし！タク。今日からお前は無楽部の部員だ！」

「いや、もう入部届はだしておいたw」

「勝手に出すなよ！！！！！！！！！！」

と、言う事で二ッ谷拓が無楽部に入ったw。テッテレー。

クアンタム！（後書き）

なんか今日のはｇｄｇｄだ・・・

トンネル

放課後の教室

「ねえ、うわさのトンネルのこと知ってる？」

「あー知ってるー。羅刹湖の近くのやつでしょ」

「そうそう。あそこにはいるとなんか怖いことが起きるんだってー」

「こわーい」

「こわいよねー」

そんなことを話している女子たちの脇を通り、タツトは部室に向かった。・・・・なんか起こるってアバウトすぎじゃね？

昨日はタクが入部した。話してみると意外と面白いやつだ。もう部室にいるはずだ。

そんなこんなで部室。

入るとタクが片隅で三角座りをしてた。こげぱん状態だ。

ソファーには女子二人が座っていつもの活動をしている。・・・つまり意味もなくしゃべってる。

「よーう」

「あ、タツト」

「おはよー」

『おはよー』は違う。『その日にはじめて合う人にはおはようだ！』と主張する人はいるかもしれないがこいつとはさっき教室で会ってる。

「そこのこげぱんはなんだ？」

「なんか『はじめまして！』とか言ってきたから無視した」

「なんで？」

「知らない人だから」

俺はタクに聞く。お、『タクに聞く』って韻をふんでるな。

「何があった？」

「うう・・・なんか部室はいったら・・・なんか女の子がいて・・・なんかかわいかったから・・声かけたら・・・」

「そうか。・・・・ユカ、こいつ新しい部員だから。メールしたはずだけど？カスミにも・・・」

「・・・？そうなの？え？あっ・・・。・・・・えーと・・・ごめんね？」

「いや・・・ほんと気づかなかっただけなの。ほんとにわざとじゃ無いから」

わざとだと思います。だってさっき『無視した』って言ってたもん。

「いや・・・分かってくれればいいから・・・・」

「えーっときみ名前はなんていうの？」

「タクって呼んでください。フルネームは教えません」

おおなんだこいつ。デスノートでも恐れてるのか？

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・！・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

気まずい沈黙が流れる。ちなみに途中の『！』は俺がコーラをこぼしそうになった時のアレだ。

「そうだ！」

急にカスミが叫ぶ。

「肝試し！」

「は？」

「いやせっかくタクくんが入ってくれたんだし、みんなの親睦を深めるためになんかやった方がいいと思って・・・」

「で、肝試し？」

「そう。うわさのトンネルのことは知ってるでしょ」

あの女子たちがしゃべってたやつか。

「そこに行くと？」

「そう。すばらしい暇つぶしだと思うけど？」

うーむ。それを言われると弱い。

「俺はいいぞ。お前らは？」

「わ、私もいいよ！」

「お・・・れ・・・もいい・・・よ・・・・。」

・・・タクダメージ受けまくリングだな。

「じゃ、今度の日曜にでも行くか」

「さんせーい」

と、言うわけで日曜。

「おはよー」

メールしといたからタツヤもきた。この『おはよー』は、合っている。今、朝だから。

「おーう」

「みんなそろったかー？」

「はーい」

「イエーイ」

「ひゃっほー」

・・・タクはまだ回復してないのか。

「じゃー行くぞー」

バスに揺られること２０分。

俺たちは羅刹湖の辺のバス停で下りた。

「なんで羅刹湖なんだろうな」

「なんとなくかっこいいかららしいぞ」

歩くこと3分。

「付いたぞー」

「おお・・・」

「すごいねー」

そのトンネルはとってもでかくて暗かった。

「それじゃーはいるぞー」

「おー・・・・」

そして俺らはこの真っ暗なトンネルに足を踏み入れた。

「暗ーい」

「広いんだなー」

「待ってくれー」

「うおーなんかヌメヌメしてるー」

「ねえ！」

この声はユカだ。

「なんか怖いから手つなごうよ！」

「さんせーい」

「じゃあみんな真ん中に集まれー」

「わー」

「きゃー」

「ひゃっほー」

「ひょー」

「俺の隣はユカとタクか」

「えへへー」

タクはまだ元気が無いのか。

・・・ん？なんか違和感が・・・。気のせいか。

しばらく歩くと出口が見えた。

「もう少しだー」

「あ、ほんとだ」

タクももう元気を取り戻したようだ。・・・こんなところで元気になるってすげーな

「まてーーーー」

？

「誰だ今なんか言ったの」

「？　さあ？」

「むあああああてええええええ」

「ぎゃーーーーーーーー！！！！」

最後はみんな手を離して走り出した。

トンネルの外。

「ぐわーーーー。怖かった。」

「ほんとだねー」

「でも私の両隣人がいたから良かったー」

「俺もー」

「おいらもー」

「我輩もー」

・・・・？・・・・・は！？

「ちょっと待て。俺たち5人なんだから両側はさまれてる人は3人だけなはずだぞ！」

「へ？」

「・・・・え？」

「ええーーーーー！！！」

「待て待て待て待て。ほんっとにお前ら両隣いたのか？・・・俺はユカとタクがいたぞ」

「・・・・よくわかんなかった」

「・・・・おいらもー」

「・・・・我輩もー」

サーーーーーーーッ　（↑血の気が引く音）

「落ち着け。みんなの発言を確かめよう。最初になんか言ったの誰だ？」

「わたし。暗ーいって言った」

「・・・ユカか。次は？」

「タツトが広いんだなーって言ってた」

「あ、俺だったか。次は？」

「待ってくれーって誰か男が・・・」

こいつ記憶力すげーな

「タクか？」

「俺そんなこといってないぞ」

「じゃタツヤ？」

「僕も言ってない」

サーーーーーーーッ（↑さっきと同じ）

「次！次なんか言ったのは？」

「あ、僕がヌメヌメしてるーって言った」

「その次は？」

「私が手をつなごうって言った」

「それで？」

「私がさんせーいって言って・・・」

「俺が集まれーって言ったのか」

「僕がわーって言った」

「わたしはきゃー」

「わたしはひゃっほーって言ったけど」

「ひょーって誰かが・・・。タクか？」

「・・・言ってない。落ち込んでたから」

サーーーーーーーーッ（↑ry）

あの違和感はこれかあーーーーーー！！

「うおーーーこえーーー！！」

「こんにちは」

突然変なおっさんが現れた。

「うわ！」

「だ、誰？」

「あ、私ココでアルバイトをしてるものです」

「・・・ん？」

「ここにくる人を怖がらせてるんですよ」

・・・・は？

「じゃ、手つないだのは・・・？」

「はい。わたし誰かとつなぎました」

「あーーーー！！あのしわしわはおじさんだったんだ！」

ふむ。カスミとつないだんだな・・・・ってか気づけや

「ふー。びくったー」

「ふふ・・・。では私はこれで」

「はーい。・・・でも『待ってくれー』とか『ひょー』とか言うのはすげー怖かったですー」

「はい？私そんなこと言ってませんが」

そういっておじさんはトンネルに戻っていった。

「え？・・・じゃ、誰が・・・・」

サーーーーーーーーーーーーーーーーッ

トンネル（後書き）

疲れました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8961k/

無為を楽しく過ごすため

2011年11月17日19時04分発行